山海名産圖會

五

日本山海名産圖會巻之五

目録

○水母　一名　備眼公　海舌

諸州に産して備前殊に名産とす又唐水母朝鮮水母と云ハ肥前に産をとえハ異國より長崎へ傳送せし物なるべかく近ごろ今ハ本朝にも其法を覚えて製し同く唐水母と称す其製法ハ石灰と明礬とにて浸し晒して血汁をされバ色変じて潔白なり又備前ハ櫟の葉を少し炙て臼にて舂き塩にて和し浸すとあり其外數種あり中にも水な母又色黒き物赤きものハ皆毒ありとて漁人これを採事なし

○形ハ蓮の葉を覆ひたるが如く其邊に足の如き物あり色は紅紫にて眼もはなし腹の下に糸のごとく繁く長く曳く物あり魚蝦かならず是に隨附を俗にこれが眼を借てとし游ぐともいへり故に備眼公の名あり○大なるものは盤のごとく小なる物ハ盆のごとし

備前水母

其味淡く薑醋などに和して食ふ也大抵泥海の産にて筑前備前等に多く江東にハ鮮し○是を採るにハ九月十月の比海上に浮漂ひて流るゝを舟より攩網を以て採る波荒き時ハ磯へうちあぐるもあるなり

我恋ハ海の月をぞ待ちわぶるくらげの骨にあふ世ありやと　夫木抄　源仲正

○石灰　一名　染灰　散灰　堊石

今近江の物上品とし美濃又是に等し是金気なき地なればなり元ハ和州芳野高原に焼初て其年内未詳といへども本朝用ひること甚古し桓武天皇大内裏御造営清涼殿御座の傍に石灰擅を塗作らせたまひて天子親四方拝などの大席とし其外に用るに益あることもつとも多し先億萬の舟楫億萬の垣牆池水を蔵つ物溝洫器物に至るまで是によらざれバ成らず實に天下の至寶なり

諺に都なるも外百里の内外土中かならずこの石を生ずといへり

○今江州伊吹山近邊又石部に焼物皆青石なり山州鞍馬に焼物ハ夜色石にて青石にハ劣れり青白なるハ是に次ぐ石ハ必土内に掩ふる事二三丈なるを堀取りけらずれて風霧を見る物ハ取らず伊吹山の麓更地山にハ一面の青石なり島筋ある物ハ下品とて堀出し矢をもつて打破て手挊轉木を以て二百間斗の山を磨落せバ凡碎けて地に付くくだけざる物ハよりとせんやぶ川より船にて流せり

蠣蠔を焼くもの石灰に劣れて

燔法ハ　竈の高さ三尺廣さ周経四間計田土にて製る下に風の通ずる穴あり先石ハ尚打砕きて程よく満しその其上へ炭を並べさながらくく火を置き火気満て底に透るを候ひて火を消し灰を取出して幾度もあり又美濃にて焼く竈の方ハ異なり櫓竈といひて高一丈周経三尺斗内ハ下程次第に細く三角にして

近江石灰

燒たる灰を自然と底に落さんが爲なり石と炭とを交へて幾く
重も積重下より燒きて火氣を登せ底より燒落るを横
の穴より掻出せりかくて次第に石と炭とを上へ積添て燔初むる
より凡百日斗の間晝夜絶る事なし是中華の方のごとし春夏
冬ハ燔をなし燔きて二十日許風中におけバ熱氣の蒸せて自然
吹化して粉となる又急に用る者ハ水をそゝげバ忽ち解散をとぐ
然れども風化の物をよしとしてはじめより俵に篭めて風のよく
通る所に納て貯へ置けバ次第に目も重く灰も自然に倍しはじめ
出るとき俵も後にハ張切る許となれり是をフクルといふかくて一年
ほど越えるかぎりぐに市中へ送り出させりさてかくなりて
後ハ大に水を忌めりしめりを受けバ忽ち燃出ていかんともしがたし
なし故に舟中にハ是を専と守り又牛に負せて出るにも雨の
ひに出て牛を損ずと恐れ常に牛御の腰に鎌をさし置

繩をもてやし切解の用意とぞ

○蠣灰　蠣房のことハ蠣の条下にいへるごとし年久しき物ハ
大さ數丈崎嶇として山形のごとさのもあり海邊の人ハ別に鑿と
槌と戦持して足を濡して是を採りて燔き用ゆ　今菜舖に售る所の牡蠣ハ郎氏碎けたるなり
大坂などに用ゆるもの多くハ此灰にして石灰ハすくなし故に灰屋
招牌に本石灰と記しぬる物ハ近江の物をさせり燔方石灰にかはらず
事なし但し蛤蜆ハ燔らるゝ至て下品なり

○灰用方　舟の縫合せの目を固むるにハ桐の油魚の油に厚さ
絹細羅を調へ和して杵く事千許にて用ゆ○又墻石砌などにハ
先篩ふて石塊を去て水に調へ粘合せ油をかふ○壁を塗るにハ紙
苆を加ふ○水を貯ふ池などにハ灰一分に河沙黄土二分土塊を篩ふて
合て和し粘合せて造れバ堅固にして永く隳壊せず此余瀬を造るも又
然なと造るも加え用ゆ尚其用枚挙べからず

美濃石灰櫓窯
近江石灰窯

○陶器

諸州數品有中にも肥前國伊萬里焼と云を本朝第一とす此窯山凡十八ヶ所を上場とす

○大河内山 ○三河内山 ○和泉山 ○上幸平 ○本幸平
○大樽 ○中樽 ○白川 ○稗古場 ○赤繪町
○中野原 ○岩屋 ○長原 ○南河原上下二所
○外尾 ○黒牟田 ○廣瀬 ○一の瀬 ○應法山

等にて此内大河内ハ鍋島の御用山三河内ハ平戸の御用山にして他所の貨賣する事を禁ず伊萬里ハ商人の幅湊せる津にて焼造るの場にハあらず凡松浦郡有田のうちにして其内外尾三ッ股稗古場ハ同國の領なれども又廣瀬などハ青磁物多くして上品なし都合二十四五所にあれども十八ヶ所ハ泉山の側にありて是土の出る山也

○堊土　泉山に出て國中の名産本朝他山に比類なし中華ハ中國の五六ヶ處にも出せり是土にして土にあらず石にあらず其性甚堅硬し拳鑿ともろくおかさき金杵の添水碓に是を舂しむ　杵の幅一尺斗厚さ一尺五六寸長さ一間半斗　最水勢はやくそつけて碓の數多く連らねよく末粉となりたるに又他の土の柔軟なるを二三品和し合せて家の内の溜池に漂し度々拌通しよく和したるを飯纏に漉し又外の溜池へ移しよく澄し其上に浮きたるものを細料とし中を普通の上品に用ひ底に下沈たるハ取捨て不用とす其細干の土を素焼窯の脊に塗附内の火力を借りて吸乾なれば最これをよきさ角を候ひとりて搔き落し重て清水の調和しかの團子のごとく粘和して工人に與ふるなり是まで婦人の所為なり

○造瓷坯器　凡瓷坯を造るに両種あり一つハ印器と云方圓數品觚甕　爐合の類　屏風　燭臺の類にも及べり是等ハ凡て塑

肥前伊萬利陶器

同素焼
窯
同過銹
同打圏書画

成して或ハ両に破り或ハ両に截り又再び白泥を延つて範に摸し或ハそのまゝにて印を押もあり又おろし土の銹水を和して塗り合取付なども有るなり ○一に圓器といひて凡大小億萬の杯盤ハ人間日用の物にして其數を造る車十に九なり此圓器を造るにハ先陶車を製して其圓盤上下二つにして下の物少し大なり真中に真木一根を竪に埋む車三尺許高さ二尺許上の車の真中に土を置て造る下の車ハ工人の足にて廻し須臾も廻て止ことなし両手をもつかの上の土を上へ押捧げ指自ら内に交て車の旋轉が中に拇指ハ器の底によりて其形の異法心にまかせことごとく手のうち指尖の妙工見るがうちに其數を造て其様千萬の數も一氣の内に出るがごとくにして大小をはやまうべし又椀鉢の類の外の輪臺を付るにハ微し乾して再び車に上せ小刀を以て輪臺の内外を削て成し砕缺もし此時に補ひ或ハ鉏手瓶の水口なども別に造て粘土を合せて和付させ又是を陰乾として極白に至らしめ素焼窯へ入るゝなり

○素焼窯ハ圖のごとく糀室の如き物にて器物を内に積てかさね火門一方によりて薪を用ひ度量を候ひ火を消し其まゝ飴くさません

右素焼のよく冷るを取出し一度水に

○折圈書画再入窯

洗ひ毛綿烈衣にて巾き磨きり茶椀鉢などの内外上下の圏輪乃筋と画くにハ又車に上せ筆を其所にあてゝくるはまをめぐらせり然して書画を施し其上へ銹漿を二度過てよく乾し本窯へ納ることく焼けバ火を出て後画自ら顕る取出し又水に洗ふを全備とせとごとく土を取るよりはじめて終成までハさゞ一杯の小皿なりといへども其工力を過ること七十二度にして其微細節目尚其數云盡をべからず

○素焼の窯ハ家の内にあり本窯ハ斜阜山岡の上に造りて必平地にはなし皆一窯宛一級高くし内の廣さ凡三十坪是を二六つも連接し

同本窯

て悉く其接目に火氣の通ぜる窓を開く然れども火ハ窯ごとに焚く
内にハ器物をのせる臺あり即土にて制し一ツ宛のせて寸隙なく一方を
細長く明置それへ薪を入るゝ此火門ハすこに高二尺計余ありて焚こと凡
晝夜三四日にして一窯に薪凡二萬本を費やすとぞ焚様に手練ありて
上人下人の雇賃ハ論ぞ 追く投込むたび木の重さうつぬやうにするとしかし 又戸口の脇に手鞠程
の穴有是ハ時く蓋をとりて度量を候ひ其成熟を見るべし火を消し
其まゝよく冷して取出すに一窯の物凡百俵に及ぶ
○過銹ハ即ちゐる土の内にて上澄の上品をとりそれに蚊子木の皮ハと
焼たる灰を調和して最増減加味家々の法ありて一概ならず
○回青ハ 元漢渡の物にしてその名未詳是亦よく細末して水と
和し畫く時ハ其色真皂なれども火を出て後青碧色と変ず
天工開物を見るに是惣じ一味の無名異なり此無名異といふハ山に
て歳を久しく焼たる下に異色の塊生ず是を藥木膠と云是も
無名異の名ありて又石州銀山よりも同名の物あり本条に載る物にハあらず
ぞ是ハ土中より出る紫色の粉を水干したる物にて血止とする乃ち
最も偽物多し本条の無名異ハ地面に浮生して深土ハ生ぜず
堀に三尺にいたるとぞ上中下の品ありてこれを鍛錬に上る物ハ
火を出して翠毛色となり中なるものハ微青なるも元舶来の物と
上品とし大なるハ僅に一分計小ハ至て細に砂のごとし尚上品下品多し
○赤繪の物ハ錦様と云て五彩金銀を銹に施すを是一山の秘術
として他外を禁ぞて故に此に略す是ハかの硝子銹を用ゆといへり
○惣て南京焼の古器ハいまだ其白埴ハ得ざる時なりしや土ハ土器
土に似て甚軟なり其上藥に硝子を加ふる由にて自ら缺損ぞと是
を今虫喰出るごとく賞ぞれども用に適してハ今の物にあらず 但
回青繪の上銹ハ銹の上より出たる如見ゆるハ南京物の妙とし云へども
硝子藥の助なり日本乃青繪ハ藥の下に沈みるが如しつあるハ

越後縮布

硝子を用ひざるなりして是又適用の為に備ふる

○陶器の事ハ舊事記に茅渟縣に大陶祇と云けり茅渟ハ和泉の國に屬して今も陶器村あり古ハ物を盛るにことごとく土器又木の葉を用ひ今も堂上にてハ土器を用ひてあるも塑なり是上古質朴の遺製を捨たまハぬ風儀を見るべし

日本記神代巻に嚴瓮 嚴瓮之置 忌瓮など皆神を祭るの土器にし又和名鈔に缶をヒラカといひて斗を受るの酒器なりといへり 斗ハ今の一斗なり 延喜式に盆 瓮と云も皆古質の器なり後世に軍陣の出門のときに是を設くとイツヘのヲキモノといふ 又今も忌部といふ古物ハ古語に是が以て陶器を司どる性もあり今の伊萬里に燒はじめし年月未詳

○織布

大和奈良越後近江などに織出る事夥しく中にも越後を名産とし越後縮と称して苧麻に生質よく紡績の精工なりといへ是越後に織はじめしことハ未詳といへども南都近江よりハ古かるべし其故ハ越後連接の國信濃をはじめ武藏下総下野常陸など皆古ハ苧麻の多く生ぜし地なれバ國の名ともそれによりて號つる物下総上総信濃なり上総下総ハえフサの國といひて即ちフサアサの轉語なり又麻をシナといふハ東國の方言にて今も尚あつ夷蝦人の帯とシナ云木の皮にて作ると云も是なり信濃ハシナヌノと云よりて専織出せし地なるべし 和名抄に信濃の國郡にシナといふ名多し 更科 是晒ある地なるべし 穂科 干したる地なるべし 倉科 麻を納めし倉ら 仁科 煮て皮を剥しなるべし 又伊那郡のうちに麻績 又更科郡に麻績などの名ありて即ち麻を績ある地なり 神樂哥に「本結作るあさのつくや麻をしはしくと云 又

越後布晒雪

延喜式内蔵寮長門の國交易よまくゐる所常陸武蔵下総の麻
の子是古の食ふり又大蔵省春秋二季の禄布ニ信濃布を以内侍司に充
るよも見へく皆是證とするに足あり故ニ越後の國ハ連接なるを以
自ら後世此ニ移せしなるべし常陸ハ倭文といひて島摸様など織出
したる名なりともいへり

○越後の國ハ十月比より三月までハ雪家を埋みて大道の往来ハ屋
の棟よりも高く故ニ家の宇を深く作りて是ぶ往来となして家向
ひへ通ふ又雪ニ多くハ鷹木を付て上下ほされバ山野谷中ともいへども草
葉樹損ど隠し耕作の便を失へバ男女老少となく織布を業と
するを實ニ國中天資の富なり○　今柏崎といふは海邊ニして
布商人の幅湊し小千谷ハ男居ニて亦商人有是信濃まちうし
苧麻を種る地ハ今ハ下谷の邊ニ多く千手と云所ハかさり島上織
の場にて塩澤町ハ絣かさり十日町ハかさりし島縞の内の邊ハ白縮
と尊ぶ所一村ニ一品の島摸様とのミ織りて他品を混ぜざる問屋
是を取合せて諸國ニ貨賣す

○苧麻種植并漂染織の事　苧麻ハ土として生ぜざる所
なし撒子分頭の両法あり色も青黄の両様あり毎歳両度刈
物なり然れども土によりて同種のものも其性の強弱有既ニ近江
ニ種る物其性柔滑なり東國寒地の物ハ至て強し故ニ越後ハ其性
のこはしけれど都ニ遠くて人性も質素なれバ工巧最精し

○大麻ハ楓葉の如く苧麻ハ桐の葉ニ似く大ニ異なり苧麻ハ生ニ
て皮を剥ぎ大麻ハ煮ベゴキと云て煮て剥なり大麻ハ雄ハ花ありサ
クラアサと云雌ハ花なく實あり是種にて蒔ハ自ら交りして生ず
即雌雄なり苧麻ハカラムシとも云ひて苗高五尺許五月八日ニ刈其
跡を焚きておけバ来年肥太なりとて是奈良をともいひて一國都
ニ織物是なり越後最苧麻なり種類山野ニ多し ○凡苧の皮

剥取りて後若雨にあへば腐爛する故に晴天を見究むるにあらざれバ折らずされども草を破折の時ハ水を以浸し是亦廿刻許よう久しくへひたさねど色ハ淡黄なるを漂工屋是を晒して白色となるまへ先稲灰と石灰とを以て湯を加へ煮て又流水に入二三度すゝぎ晒らす

○糸に紡るにハ上手の者ハ脚車を用ゆ是女一人の手力に三倍す其うち性よき物を撰りて細く破さて織るなり粗きハ糾合せて縄或ハ縫線の糸とす

是皆婦人の手力専らにして男相交らず故に國俗女を産すれバ是を喜ぶそれが中に二歳三歳の時指の爪を候ひ細手粗手の生質を候ひ若細手の生れ付なれバ國中にかゝへて是をもとむ

○糸に染る事京都の見ぞざにかゝることなし島類ハ織上を宿水に操洗らひ陰乾とす白布ハ織りて後に晒らす是を晒すにハ彼所にて操洗ひふ事三五度にして又降積れる雪に敷ならべ其上に亦雪を積らせ又其上へならべ幾重といふことなく高堤を築きたる如く日のたつにて自然と消ゆくにしたがひ至て白くなるを又さらによく操洗ふ

○一説に云布商人習俗の俚言に布の精粗上下の品を見わくるに一合と言を極細の布とし二合三合是に次第して粗是山中にて織布なり一合ハ山の頂上にして人質も甚素朴なり故に衣食住の費一年の入用妻子に給する取とらへ五六十目許にして細布一端の料の紡績に事足りも甚いとませはしからず故に至細の物ハ山の一合にかぎるそれより二合三合と次第にふもとくなるにしたがひ世事の緩急にかゝりといへどもそれにてわりへバ当世の器物諸藝萬端精良昔に努るつと此二合三合に等し

蝦夷人
捕膃肭

○膃肭獣

是松前の産物といへども蝦夷地ヨシヤてこべといふ所にて採るなり寒中三十日より二月に及ぶされども春の物ハ塩の利なしとて貢献必寒中の物をよしとす蝦夷地に運上屋といひて松前より七八十里東北によりて最舟路其遠きこと七八百里もあることといへり此運上屋ハ松前奥州近江などの其外商人の出店にて先松前より有司下りて其交易を校監し日本より渡る物ハ米塩麹たばこ器物等にて又物ハなし又蝦夷の産ハ海狗　膃肭　熊　同膽　鹿の皮　鱈　鮭　昆布　鮑　鱒　ニシン　數の子　等なり其内蝦夷錦ハ満州韃靼ヱゾへ通じての産にて蝦夷地ソウヤと云所へ持渡る又熊ハ其子を手取にして其翌月親を捕まり子ハ婦人の乳にて養ひ歯の生ふるに至りて雑物を食せしめ成長の後祭木にてゑめごはしむる故さらに薦にのせ酒肉を具へ祭りて後膽を取りて肉を食ふ

○膃肭獣をヲツトセイといふ人ハ誤なり獣の名ハヲツトツなり或書に膃肭臍とかきしハ外腎の事にして睾丸なり薬用是を要とし肉の論ハさてなし故に陰茎といひて賣買する物ハ外腎の間違なるべし津軽南部よりも出て真偽甚紛らはし是種類有る故なり海獺海狗一名とはいへども是種類の惣名なるべし其余海狗と云有是は和語にアザラシと云皮に黒斑点有て膃肭に似たり葦鹿の同種なるべし○海獺ハ海のカハヲソにて是全く形状膃肭に相似たり是と別にハ前の歯二重に生ふる物真の膃肭とす又一説にハ二重歯ハ一歯許なりともいへり又頭上に塩をふく一穴有り毛にかくれて見えがたし肉にても百ヒロにても寒水の内に投じて其水温煖にして氷ざる物真の膃肭と知るべし

同 運上屋

○陸茸といふも偽物有て百ヒロを以て造るといへり故に毛なし
号て百ヒロタケリと云 真なる物ハ三寸許赤色にして本に毛あり全
身灰黒水獺に似たれども色て微し長し顔ハ猫に似て小さし口の吻
鬚甚太さし 咽の次に左右に足有大鰭のごとし 後の足ハ尾前に有
てともに長さ一尺許 其尖に五ツの爪あり尾ハ細し海底最とも深所に
棲又ハ海邊石上に鼾睡をし或ハ群をなして寐ながら流る其内一疋睡
らずして候ひ若船来れバ忽ち聲をあげて睡をさまさせ水中に隠
水を行く時ハ半身を水上に出して能く游ぎ波を切ること最盛なり
海獺もまたく右にいふがごとく今膃肭といひて来る物多くハ海獺に
て其真ハ得がたし南部一粒金丹も是をとるといへど才一といへどもかなり
本草集解に東海水中に出ると記せしハ是中華にも稀にして即
日本より渡ることハ見えたり ○ 蝦夷にてハ大なるを 子ツフ 中ばなるを ヨキ
小を ウ子ウと云是真の膃肭なり鰭を ニタウヒと云 一疋を一羽と

云津軽にてハ テウヒと称してサカナとも其中に大なるをトとい
ふ今も女児の言に魚をさしてトヽと云ハ若や是より言来ぬるも
あるべけれども中華にも此言なり
又夫木集雑十八夢の題に建長八年百首歌合衣笠内大臣
「我恋ハ海驢の寝ながれさめやらぬ夢なりながら絶やはてなん
と詠じたるハ海馬の種類にて別なり又海驢乃文字を日本記神代
巻龍宮の章にミチ(海驢)の皮とも訓て
○捕猟 蝦夷人是を捕るにハ縄をつけたる舟に乗りてかの
寝ながれの群を見れバ孤の尾を以てふりてかの起番の一羽の見れ
ざれバ大に恐れて聲をたてゝ去るを待ちて寝たる所をころし或ハヤス
などにて採ることを其手練他の及ぶ所にあらず舟いとはやく掉さすこと
すみやかに前後へ漕ぐなり
○或云膃肭臍といふハ臍なるべし然るに外腎とよぶハ如何或書に彼獣

を得と欲して松前南部の人に貪むれども兎角して得がたし此比土人の謂を聞けバ膃と陰茎と甚だ通し故陰茎を取る時必膃を損じて全くなし或人云是雄なり其雌ハ必膃なからんか

○昆布 ○和名ヒロメ○一名海布

是ハ六月土用中よりして常に採ることなし同じく蝦夷松前江刺箱館などにても採るより小舟に乗り鎌を持ち水中に暫くありて昆布を抱是にほどかれて浮む皆海底の石に生ひて長さ三四尺より十間許にものありそれましにハ石ともにたぐれども十日許りして根自ら離る長さハよきほどに切りて蝦夷松前の海濱の砂上家の上往来の道に至るまで一日乾して實に錐を立るの隙もなし暮に納めて小家に積み其上に莚を覆ふこと一夜にして汐浮きさするを荒昆布と云（世俗に蝦夷の家ハ昆布をもつて葺くと云ハ此乾したるをいふなるべし家ハ多く板庇し板囲ひなり）色赤きを上品とし

て償ふに其階級をするてあり又八九月の比自然打よせたるを寄せ昆布と云 ○昔ハ越前敦賀に傳送して若狭小濱の市人是を制して若狭昆布と號を若狭より京師に傳送して京師にも是を制して京昆布と号し味最とも勝れり

○右ハ皆俳諧行脚の人松前往来の話に傳へきりて實に見及びしことにハあらざれど尚其蝦夷人の衣服などのことも聞しに先年つにハ日本の古手を貴ひ富るものハ一郷の社宴などにハ酒樽を積みそろ上にかの日本の古手をいくらもかさねて装飾とし又その地にて織物ハアツシといふ木の皮にて色黄にして紋有方言アツシと云て甚臭き物なりといふ縦ハ左に合せ二ナの皮を帯とし男女とも常に浴湯せず眉を両眼の上に一文字に生ひ髪ハ勿論鬚髯ともに切ることなければ甚だ長し食する時ハ箸にて左のゆびに持ちて髭をかゝげて

唐船入津

同菩薩揚

啜り込む酒ハ行器の如き物に入まゝく杯ハ飯椀を用ゆ其椀皆巴の紋を付たり其故を知らば女人ハ皆唇に入墨して男女とも深ハ鼻より流るゝなり山野に出るものは皆雪中といへども跣にて腰にめヱリを持せり最木弓木矢を用ゆ又ブスといひて熊鹿を採る矢に塗る所乃毒薬ハイケマといふ草の根と蜂とを合して製せし物なりとぞ但し膃肭臍にハ此毒を用ひず

為家卿の哥に

こゝろそへ思ひもそむるこゝちかくの思ひそまつる世しる秋の夜乃月

又 絹巴の發句に

春の夜やゑぞそうてさふくゑぞの月

といへる此てきしもいへりの来たりしも分明に知る物なし然るに或人の傳写に来るもの序を以てこゝに圖さと

十二播 木の皮にて巻き他ろ白き絹にて竹色を帯たる藤の蔓のごとき木のかゝりて惣長一尺二寸そりあり

挟どるに是コサといへば[illegible]彼地の笛なるべしやや口に附ゑんを含くに空に向てふきならげ其邊の月影を曇らせて漁捕しけるとの又一説に山中海邊などへ出るもの落る木の葉を拾ひそらそくと巻てて是を吹くに實に笛の音を出して秋情を催ほすとコサとも云とぞ

○俗傳に義經蝦夷へ渡りしとの事虚實さだかならねどいつでも是正説なり海濱に辨慶壽九名もあり又清朝ハ清和の裔と云も即義經蝦夷より傳へ越しなる證とも云ふことども多きよも皆ゝり蝦夷より韃靼に近し

○異國産物

長崎唐人屋敷并新地御蔵

○太閤秀吉公の時よハ泉州堺浦へ着きしを其後肥前平戸ニ移る亀
の時より長崎ニ改まりて今ニ絶ることなし此地ハ元来山中なりし
を玉の浦深江といふ所を切開きて今萬家繁花の湊となれり唐船
ハ南京北京ホクチウ チヤクチウ其外惣て一年ニ十三艘を来さしむ
藥種絹布砂糖紙器物其余云盡しがたし野茂深堀西戸の上ヶ所
ニ遠見の目鏡を居て凡海上四十里許を見通し入船の影を見るべく追々
播を立て官聴へ註進し船の近づくと見れバ大通詞小通詞其外官
人船を飛せて是を迎へ唐船ニ乗移て御朱印などの撿挍を遂
て着岸荷揚を催すニ上荷船数艘を出し新地御蔵へ納む此蔵揚
終なるを揚と云てけり是ハすべて船中ニまつるところにて本邦乃船
玉ニ等しき官人の姿なる像を祭る其像は長崎の寺へ預け
納る其行装甚いかめしく夜も挑灯を真先ニ照らし連なりて

鉦をならし棒を振りて踊躍を（人是を関羽の像なりと云ハ謬なり）船ハ梅が崎の鼻とゆふ
所ニはなぎれて唐人屋敷へ入て是ニも無事着の賀宴を設く此
時丸山町寄合町の遊女いりきたり客を定めて食養をし此後出船
ニ臨んで御定法の御渡し物　煎海鼡　昆布　干鮑　紙　傘
ぬめ物　ふかの鰭　茯苓　其外小間物数品或ハ時の好ミにも任せ
ならぶ又唐物ハ官聴御排物となり五拾の商人より入札して是を配分す

○阿蘭陀船

是毎年七月比入津す同しく遠見より注進けれバ去年渡りしの紅
毛カピタン又大通詞小通詞官者附添ひ飛船二艘幡を立て漕出
し元船へ乗移て御朱印等撿挍をとて漕戻る其跡ニて元船よ
ハ石火矢を發事九つ此勢ひよ従いて引船いりきたりて沖手の舩を
金西戸うらの戸町など所々御番所乃むかひより石火矢

同出島紅毛家敷

紅毛船入津

紅毛船

と發事七ツ宛出島の湊に入て又九ツと響かし此時船に旛をたてれバ出島屋敷にも同じく竪る是を播合といふころに於て音樂有て其音妙なりこれより碇をおろし又石火矢を發こと十八ツにして此時黒烟空中に満ちて暫時船を見る事なし船中には其烟の間に四十八の帆を悉く巻上十所に旗を立てとりどり装飾し烟次第に消るに随ひ顕れ更に造り立たるごとく其花美眼を奪ふ許甚ご見事なりかくてえ船のカビタン小舟に乗りて出島にいづれとし紅毛屋敷前年のカビタン従者其外揺女などほどして迎ひ是と迎ひ入れて宴を催すなり荷ハ同じく薬種小間物類他國の珎器どもを是を揚るに凡四十日許なり本邦よりの渡し物ハ先銅竿紙類其外器物等を賜りて毎年九月十九日を前年のカビタンの發船と相定る當年のカビタンを殘して正月十五日には貢献の物を持して江府に趣き[illegible]五月の比長崎にかへり又新船入津を相待てり

跋

こよふ補世ありしかともおもへは見るへき本の
かたをみなの川渡のはてしまかきなりしぬる
閲存に…ひとしく様にとも遠国のさまかたちを
あこつのうちなすことも…つとしこ詠みへなく
めてたきものなそかなしくまのあたり…あめの
さはなるあつめぬうてつくものたまはし云よめそ作とぬ
かくてまさに子藍江ゆの…すこし…
袖乃みうへほころふる…
亦うそうのこまのものをたちいへつ…
[illegible]の花の…はなかね…

都名所圖會 全部六冊

拾遺都名所圖會 同 五冊

大和名所圖會 同 七冊

河内名所圖會 同 六冊

和泉名所圖會 同 四冊

攝津名所圖會 同 十二冊

五畿内名所圖會 桐笛入 合巻卅冊
廣形ならびに美本仕立

五畿内産物圖會 全部五冊
美本仕立 [illegible]

廿四輩順拜圖會 前後 全部十冊
一名 北陸道名所圖會

初集 五巻 山城 近江 越前 加賀 越中 越後 信濃 上野 以上八ヶ國

後集 五巻 武藏 下総 常陸 陸奥 出羽 下野 相模 甲斐 駿河 遠江 參河 尾張 美濃

附録 伊勢 大和 河内 摂津 備後 以上十八ヶ國

同 順拜記 小本 全一冊
京都より順拜の道の記をしるす

同 參詣記 小本 全一冊
江戸より順拜の道の記をしるす

此二小冊は廿四輩の霊跡奥地を委く記し且名所舊跡なども微細にしるし實に此書を携へて順拜しあゆみ給はゞ[illegible]と委しくすれば順拜者の宝なりけり

住吉名所圖會 全部五冊

紀州名所圖會
初集 同 五冊
二集 同 五冊
三集 同 七冊
四集 同 六冊
五集 近刻

中國名所圖會 同 四冊
大坂安治川口より讃州の諸名所不残、象頭山金毘羅の縁起霊験をくはしく述夫より宮島厳島[illegible]名勝旧跡委くあらはしたり

年中行事圖會 全部四冊
初集 正月より六月まで 出板
二集 七月より十二月まで 近刻

唐土名勝圖會 直隷省部 全部六冊
此書は大清輿地一統の全図より直隷京師皇城図其外朝賀儀式諸署に王公の宅を委く述又名勝名山人物故事凡て図となし実に中華一統を一眼に見る書也

畫圖西遊譚 東都司馬江漢先生著 自画 江戸より長崎迄の記行也 全部五冊
此書は先生遊歴の地奇談珍說見聞のまゝを記し、わかく平かなにて画とまじへ西海緑取長崎唐人阿蘭陀館のありさまなど面白く記し

京の水 全部二冊
大内裏図 内裏図 二面添

都名所車 小本 全部一冊

難波丸 一名 大阪武鑑 天保改正 小本 全部七冊
此書は摂陽の名所旧跡神社仏閣をはじめ大阪武鑑をくはしくしるし市中の商賈百工諸名匠居所をしるし諸名産浪華年中行事など余一切の事ども洩さずしるし必用の書なり

四天王寺伽藍記 全部一冊
七堂伽藍図 壹折添

唐土訓蒙圖彙　全部五冊

唐土の萬物天地間にあるところの事どもを悉く図となし其解を詳にし実に好事家必見未曾有の珍書なり

長崎聞見録　全部五冊

崎陽にありし年中行事并に紅毛清人来歴器物ことごとく彼地の風俗までくはしく勝地旧跡などをしるせり

長崎記行　全部一冊

此書ハ水戸赤水先生の道の記にて彼地の名所旧跡神社佛閣と風流に書つらねる書にしてよく江湖の雅君必読のものなり

東奥記行　全部一冊

こハ奥州の道の記にして勝地ある名所も風流に書しるせし書なり

懐中本

大阪寺社順拝記　全部一冊

同　名所獨案内　全　同　一冊

同　宮寺廻り　全　同　一冊

此書ハ何もも至つて小本にして大坂にある神社佛閣名所旧跡ことごとくしるせり

築山庭造傳　全部三冊

同　庭作傳　同　一冊

庭の造方泉水築山石の居方石燈籠をはじめ植木ことに林泉の法式を詳にし且諸家の名高き林泉を模写し好事家必用の書なり

籬島軒平秋里作

石組八重垣傳　全部三冊

此書ハ庭の作方より初て其の秘密の図と真行草の三ツとよりち各図をあらハし築山の規則の本にそなふ諸君閲して其絶妙を知りたまふべし

發行書林

江戸日本橋通貳丁目　須原屋茂兵衛

同　淺草茅町二丁目　須原屋伊八

同　日本橋通二丁目　山城屋佐兵衛

同　本石町十軒店　英大助

同　芝神明前　岡田屋嘉七

同　兩國横山町壹丁目　出雲寺萬治郎

同　下谷御成道　紙屋徳八

同　芝神明前　和泉屋吉兵衛

同　日本橋南壹丁目　須原屋新兵衛

大坂心斎橋通唐物町　河内屋太助